

令和4年度

関係人口創出・拡大のための
中間支援モデル構築に関する調査・検討業務

業務実施報告書
(概要)

団体名	公益社団法人 中越防災安全推進機構
事業名	中山間地域の農の『支え手』人材を増やすプログラム開発『Work Rice』『シェア・ファーム』
選択テーマ	農的關係人口について（地域内關係人口について）

- 今後もさらに過疎化が進む中山間地域の農業・農地を維持していくためには、生産者としての「作り手」に加え、農家の生産・販促活動等をサポートする「支え手」の両輪が必要である。
- そのため、中山間地域農業の「支え手」人材を確保・育成するためのプログラム『Work Rice』の開発、中山間地域の農に関わるすそ野を拡大するための『シェア・ファーム』の開設に取り組んだ。

主な活動内容

1. Work Riceの実施（柏崎市、小千谷市、上越市等）

- 米農家の日常的な農作業へのお手伝いに対して、農家が生産する米で返礼するプログラム『Work Rice』を開発。
- 生産サポートには延べ39人日のマッチングを行い、畦草刈、電柵張り・外し、除草、肥料散布、稲刈りなどの農作業のお手伝いに対し、5kg/日の米を返礼。
- クリエイティブ系サポートでは16件のマッチングを行い、米袋のパッケージデザイン、取材・web記事制作などの仕事に対して30kg/件の米を返礼。

2. シェア・ファーム（耕すbase）の実施（出雲崎町）

- 「農家のサポートまではできないが農に関わりたい」という人などを対象に、農業の楽しさ、農村の暮らしの魅力等を共有し、農業の基礎的な知識等を学ぶ『シェア・ファーム』（耕すbase）を開設。
- 交流イベントとして、植付祭（5/21）、ソバまき体験交流会（8/14）、ソバ収穫体験交流会（11/3）、ソバ打ち交流会（2/19）を開催。
- また、定例の畑の管理作業として、毎週土曜日の午前中に畑の管理作業を行い、“いつ来ても良いですよ”という環境を整備し、日常的な交流を図った。



Work Rice（畦草刈り）



Work Riceでデザインした米袋・ポスター



主な成果

1. 参加者や地域の声

（1）Work Rice

- 参加者からは、「農業のリアルな現場を体験できた」「いただいたお米が美味しかった」などの感想が多く寄せられた。アンケートでは満足度100%、「次年度も参加したい」が92.3%であった。
- 受入農家からは、「農業体験とは異なり、農業のありのままの姿を見てもらえることに意味があった」「返礼がお米（現金ではない）」という点も農家としては受入のハードルが下がる」などの声があった。

（2）耕すbase

- 町内在住者の参加も見られ、「同じ町内ではあるけど普段行く機会がない山間地域の人たちとのつながりが生まれた」「今まで見ていなかった出雲崎の魅力を発見した」などの感想が寄せられた。
- 地域側では、最初は「何かやってるなあ」という傍観者的立場であった地元住民が、多くの人の訪問や地元紙への掲載をきっかけに積極的に関わるようになった。

2. 事業を通じて得られた気づきや知見

- Work Riceには80名からの問合せ・申込があった一方で、作業現場が公共交通では行きにくい地域であるため、自家用車がなく参加を見送る方が多く見られた。そのため、中山間地域で持続的な関係人口の取組を進めるためには“足の確保”が大きな課題である。
- 耕すbaseでは、都市住民だけでなく町内非農家からもニーズがあることがわかり、“町内関係人口”という考え方が生まれた。

課題解決のための取組と成果

課題① 「支え手」となり得る人材の確保に向けた魅力的なプログラムづくり【集客】

- 県内には、新潟県が主催する中山間地域農業をサポートする棚田サポーター制度、新潟市が実施している市内果樹農家等の繁忙期を手伝うボランティア制度「農業サポーター」がある。これらの取組実績から、新潟県内でも農作業を手伝いたいという都市部のニーズはあるものの、市街地から遠く離れた中山間地域の稲作では、単なるボランティア制度では人が集まらないという現状が見られ、プログラムとしての魅力・面白味がないと人が集まらない。
- このため、①農作業のお手伝いの対価を米で支払うという今までにない仕組み、②農作業だけでなくクリエイティブな活動を取り入れ幅広く参加者を募集、③地域貢献×ツーリズムというコンセプトを掲げ『Work Rice』の発信を行った。

- 80名の問い合わせ・申込があり、プログラムの魅力としては一定の評価が得られた。
- 一方で、参加に至らなかった大きな理由の一つとして、作業現場が公共交通では行きにくい中山間地域であるため、自家用車がない・運転免許がないために参加を断念したケースが多く見られた。

“足の確保”は、中山間地域で関係人口を考える上での大きな課題。

課題② 未経験者でも農家の作業軽減に寄与できる仕組みの確立【米農家の作業軽減】

- 機械化が進んだ稲作では素人が農作業に関われる余白（関わりしろ）が少なく、一定の技術等が必要となり、「支え手」としても未経験者のサポートが米農家の作業軽減にどこまでつながるのかという課題がある。
- このため、農作業のサポートに必要な基礎的な技術を習得するため、①刈り払い機の講習会、②動画マニュアル制作（次年度から活用）などを行い、参加者の事前の技術習得に努めた。

- 「電柵張り」等は作業軽減効果◎、
- 「畦草刈り」「農薬散布」「稲刈り」は○
→作業内容によって有用性が異なる。
- 刈払機の講習会などを実施したが、講習会のために遠方から参加する人は少ない。
→講習会の内容を動画に編集し、参加者に事前視聴（令和5年度から）。

課題③ 単なる作業要員にならないようにするための継続的なつながりづくり【関係性の醸成】

- 本プログラムは関係人口の取組のなかでも特に労働色が強いいため、ややもすると単なる“労働力の提供”という一方的に都市住民の労力を搾取してしまう仕組みになりかねない。
- そのため、「地域への共感＝一緒に過ごす時間×かいた汗の量」という考えのもと、米農家と一緒にご飯を食べたり話をするなどの交流時間を確保し、「米農家の作業軽減」「共感の醸成」の両立を実現するための運用のポイントを検討した。

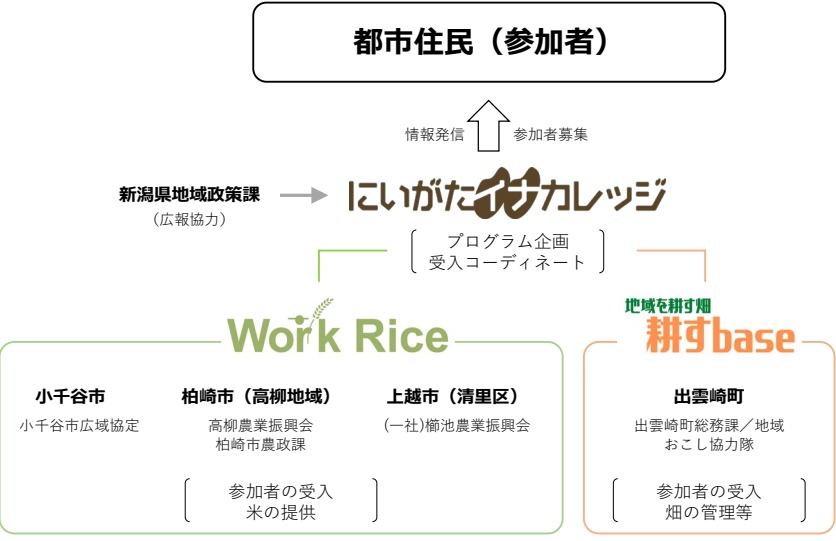
【Work Rice参加アンケート】
（満足度）
—「満足」100%
（今後の関わり）
—「次年度も参加したい」92.3%
—米等の農産物の購入意向 76.9%

課題④ 気軽に参加できるプログラムづくり【関わりやすさ】

- 中山間地域の農に関わるすそ野を拡大するため、「農家のサポートまではできないが農に関わりたい」などのライト層も参加できる受け皿として、農業の楽しさ、農村の暮らしの魅力等を共有し、基礎的な知識等を学ぶシェア・ファーム『耕すbase』を開設。将来的にはCSA農場としての自立を目指す。

- 年間36人日の参加。
- 町内にも参加ニーズがあることがわかった。
- Work Riceへの問い合わせから耕すbaseに参加するなど、2つのプログラムの相乗効果が見られた。

事業実施体制・関係機関



団体名	役割
中越防災安全推進機構 にいがたいななカレッジ	事業全体の企画、実施地域との調整、情報発信及び参加者確保、実施地域でのプログラム実行サポート、効果検証、次年度以降に向けた検討、等
小千谷市広域協定	プログラム設計支援、活動当日の対応、次年度「Work Rice」運用に向けた検討
高柳農業振興会 柏崎市農政課	受入米農家の開拓協力、受入、次年度以降の「Work Rice」運用に向けた検討
榑池農業振興会	仕事・米の提供、受入、次年度以降の「Work Rice」運用に向けての検討
出雲崎町/地域おこし協力隊	地権者との交渉、畑の管理、イベント企画、発信、参加者の受入コーディネート、など
新潟県地域政策課	除雪ボランティア参加者等への情報発信
株式会社クラウドワークス	ロゴデザイン、動画編集

自立化・自走化の検討

【Work Rice】

- Work Riceの事業を継続していくにあたり、受益者である米農家個々から費用をいただくというよりも米農家で構成され、かつ中山間地域農業の維持・発展等に資する予算を有する広域協定からの費用負担を念頭に考える。
- 次年度は、柏崎市高柳地域・小千谷市では、中山間地域等直接支払いの枠組みを活用してWork Riceを継続。上越市清里区では、同地域で令和5年度から取り組む農村RMOの一環としてWork Rice及びその他の関係人口プログラムを実施していくこととしている。

【耕すbase】

- 耕すbaseを実施したことで、町農業委員会から同様の取組を実施したい、また道の駅からも町外の人と連携した取組を行いたいなどの要望があげられたことから、次年度は農業委員会・道の駅と連携し耕すbaseをはじめとする関係人口プログラムを実施予定。

横展開の可能性

県内の他の市町村（2市村）から「うちでもやりたい」との声をいただくなど、受入にあたっての地域ニーズは一定数あるものと考えられる。

【横展開を図る上での留意事項】

- ◆プログラム実施に係る費用の確保
 - 中山間地域等直接支払い制度の受け皿であり米農家で構成される“協定”と連携し費用の確保するのが現実的。ただし、農家との間に相当な信頼関係や十分な実績などが必要。
- ◆現地でのコーディネーターの存在
 - 多くの場合受入農家は高齢者で、事務的な連絡・調製などが密に取れる現地コーディネーターの存在が必要不可欠。
- ◆交通手段の確保
 - 中山間地域の多くは公共交通が弱い弱であり、関係人口プログラムを実施する際に“足の確保”は大きな課題。

令和4年度
関係人口創出・拡大のための中間支援モデル構築に関する調査・検討業務
業務実施報告書

団体名	公益社団法人 中越防災安全推進機構
事業名	中山間地域の農の『支え手』人材を増やすプログラム開発『Work Rice』『シェア・ファーム』
選択テーマ	農的關係人口について（地域内關係人口について）

目次

1	課題の設定	2
1.1	事業の概要	2
1.2	事業実施地域の概要	2
1.3	関係人口の創出・拡大に取り組む目的	3
1.4	調査・検討すべき課題の設定	3
2	モデル事業の取組内容	5
2.1	取組の全体像	5
2.2	事業実施に係る運営体制	6
2.3	実施スケジュール	7
2.4	活動内容	7
2.5	課題解決のための取組	14
3	モデル事業としての成果検証	16
3.1	目標の達成状況	16
3.2	課題解決に向けた成果	16
3.3	その他の成果	21
4	今後の事業のあり方	22
4.1	自立化・自走化の検討	22
4.2	横展開の可能性	23

1 課題の設定

1.1 事業の概要

今後もさらに過疎化が進む中山間地域の農業・農地を維持していくためには、生産者としての「作り手」に加え、農家の生産・販促活動をサポートする「支え手」の両輪が必要と考える。本事業は中山間地域農業の「支え手」人材を確保・育成するためのプログラム『Work Rice』の開発、中山間地域の農に関わるすそ野を拡大するための『シェア・ファーム』の開設に取り組むものである。

1.2 事業実施地域の概要

(1) 新潟県小千谷市

小千谷市では平成 29 年度に集落協定の広域化が図られ、公益社団法人中越防災安全推進機構「にいがたイナカレッジ」（以下「イナカレッジ」）では広域協定の事務局を担い、生産者の所得向上に向けた商品開発、生産者の作業軽減を図るための農業機械の導入、さらに令和 2 年度からは生産者となる担い手（作り手）を育成する事業『アグリパス』（ムラの暮らしと半農半Xを学ぶ1年間のライフスタイル型就農プログラム）などの取組を進めている。今後、米の品質の見える化に向けた取組をスタートさせ、小千谷市産米の高付加価値販売に着手するため、小千谷市産米の品質や食べ方、米を生産する背景となる農村の暮らし等を発信するサイト「こめむすび」を立ち上げ積極的な情報発信を行うこととしている。

(2) 新潟県柏崎市高柳地域

19 集落から成る高柳地域では、各集落協定の代表者で構成する「高柳農業振興会」が受け皿となり、令和 3 年度からアグリパスを通じて就農希望者 2 人の受入を行い、初年度 1 人の定住・新規就農者の確保へとつなげた。同時にドローンを使った防除の取組など、米農家の作業軽減に向けたスマート農業の推進、オペレーターの育成などを進めているところであるが、依然過疎化が進む中で鳥獣害対策などの作業の手間が増え、農地を維持するための生産者一人ひとりにかかる負担が大きくなっている。

(3) 新潟県上越市清里区櫛池地区

11 集落で構成される櫛池地区では、一般社団法人櫛池農業振興会が中心となって、農産物の販売や出荷手段に乏しい生産者への庭先集荷サービス、農業体験ツアーなどに取り組むほか、令和 4 年度には特定地域づくり事業協同組合を立ち上げ、生産者の確保・育成を図っている。櫛池産コシヒカリの高付加価値販売を目指し、商品のブランド化・販路開拓などに着手するところである。

(4) 新潟県出雲崎町

出雲崎町では地域おこし協力隊を中心に“出雲崎に関わる人を増やす”をテーマに様々な活動が行われている。これまでは動画配信、蔵を使った図書スペースづくりなどに取り組み、今後も町内にいる様々な資源を活用し関係人口創出の取組を進めようとしているところである。

1.3 関係人口の創出・拡大に取り組む目的

新潟県内の中山間地域農業はそのほとんどが稲作で、担い手の減少・高齢化、耕作放棄地の増加など厳しい局面を迎えており、イナカレッジでは中山間地域等直接支払い制度加算措置を活用し、小千谷市広域協定と連携して、アグリパスを令和2年度からスタートさせ、翌3年度からその取組を柏崎市高柳地域にも広げたところである。

アグリパスを通じて地域外からの就農希望者を受け入れ、定住・新規就農者の確保を図っているところであるが、一方で道普請等の従来の地域共同作業に加え、近年では鳥獣害対策として電柵張り等の新たな作業が増え、集落自体の人口減少・高齢化が進む中で一人あたりの農地維持に関わる作業量が増大し、米農家だけで中山間地域の農業・農地を守ることが現実的に難しくなっている。また中山間地域で農業を持続的に営むためには、再生産可能な価格で米を販売することが必要条件となるが、米の高付加価値化・販売活動は決して米農家が得意とする分野ではない。

今後、中山間地域の農業を維持していくためには「作り手」を育成することと同時に、「作り手」をサポートする「支え手」（関係人口）を増やしていく必要があると考える。

1.4 調査・検討すべき課題の設定

新潟県では現在、中山間地域農業をサポートする「ECHIGO 棚田サポーター」を立ち上げ農作業ボランティアを募集しているところであるが、実際には建設業等の公共事業の受注要件となる“社会貢献活動”として従業員が動員されたり、あるいは行政職員がプライベートで参加したりするケースが多く、純粋な参加者は非常に少ない（都市住民にとって中山間地域農業のボランティアという仕組みでは魅力的に見えず人が集まらない）。一方、新潟市では市内果樹農家等の繁忙期を手伝うボランティア制度「農業サポーター」を運営し、未経験者でも出来る人手が必要な作業（果樹の袋掛け・収穫・出荷作業等）に対してボランティアを募集し、中高年を中心に360人が登録し年間3,000人日以上の稼働となっている（令和2年度）。つまり、新潟県内でも農作業を手伝いたいという都市部のニーズはあるものの、市街地から遠く離れた中山間地域の稲作では、単なるボランティア制度では人が集まらないという現状が見られる。また機械化が進んだ稲作では素人が農作業に関われる余白（関わりしろ）が少なく一定の技術等が必要となり、「支え手」といっても未経験者のサポートが米農家の作業軽減にどこまでつながるのかという課題がある（果樹・野菜の場合は素人でも手伝える作業が多い）。

これらのことを踏まえ、以下の点に留意しながら事業を進めていくこととする。

(1) 「支え手」となり得る人材の確保に向けた魅力的なプログラムづくり【集客】

中山間地域農業の「支え手」を増やしていくためには、まず人を集められる魅力的なプログラムでなければならない。本事業では、参加者が提供する“お手伝い”に対して“お米”で御礼する『Work Rice』という新たな仕組みを試行し、都市住民にとって「面白そう」「参加してみたい」と思えるプログラムとなり得るのか、魅力的なプログラムづくりを追求する。

(2) 未経験者でも農家の作業軽減に寄与できる仕組みの確立【米農家の作業軽減】

本事業は「支え手」として米農家の作業軽減を図ることが目的の一つである。このため農業未経験者でも米農家の作業軽減に寄与できるのかが問われる。農作業の「支え手」として必要な知識・技術を学ぶ研修会の開催、マニュアル作成、及びスキルや実践経験等に応じた段位制度の開発などを通じて、未経験者でも一定の技術習得を行うことで米農家の作業軽減に寄与できる仕組みづくりを検討する。米農家にとって作業軽減効果が発揮されないと継続的な受入につながらないと考える。

(3) 単なる作業要員にならないようにするための継続的なつながりづくり【関係性の醸成】

本事業は、単なる中山間地域の人手不足を補うプログラムではなく、“農作業等のお手伝い”を通して“継続的な関係性を育む”ことを目的として掲げる。一方で本事業は関係人口の取組のなかでも特に労働色が強いため、ややもすると単なる“労働力の提供”という一方的に都市住民の労力を搾取してしまう仕組みになり兼ねない。「地域への共感＝一緒に過ごす時間×かいた汗の量」という考えのもと、米農家と一緒にご飯を食べたり休憩時間に話したりするなどの交流時間を確保し、「米農家の作業軽減」と「共感の醸成」の両立を実現するための運用のポイントを検討する。

(4) 気軽に参加できるプログラムづくり【関わりやすさ】

農家の作業軽減プログラム（日常的な農作業のお手伝い）のみだと、参加にあたり「自分は本当に農家の役に立てるのだろうか」という意識が働きこれが参加にあたって（中山間地域の農に関わる機会）のハードルになってしまう恐れがあり、中山間地域の農業や文化に興味があるライト層も参加できる受け皿づくりが求められる。このため“体験”という要素を取り入れたプログラムをあわせて実施することで中山間地域農業に関わる人材のすそ野の拡大に努める。

2 モデル事業の取組内容

2.1 取組の全体像

【目指すべき中山間地域農業の姿】

「作り手」×「支え手」の両輪による中山間地域農業・農地の持続化

【本事業で目指すもの】

中山間地域の『農』を支える人材を増やす
 農家のお手伝いに対してお米で返礼するプログラム『Work Rice』の立ち上げ
 農の関わりのすそ野を広げる『シェア・ファーム』の開設

一稲作を中心とする中山間地域農業の「支え手人材」を確保・育成するため、都市住民が行う米農家の農作業の手伝い、米農家が不得手とするブランド化や販売促進活動などのサポートに対して、農家が生産した米を返礼するプログラム『Work Rice』を立ち上げるとともに、中山間地域の農に関わる人のすそ野を拡大するための『シェア・ファーム』の開設を行う。

中山間地域の農の『支え手』人材を増やすプログラム開発 『WorkRice』『シェア・ファーム』

中山間地域農業を維持していくために、これまでイナカレッジでは新規就農希望者を受け入れる『アグリバス』等の取組により『作り手』の育成に努めてきた。一方で道普請等の従来の共同作業に加え、近年では鳥獣害対策として電柵張り等の新たな作業が増え、集落自体の人口減少・高齢化が進む中で一人あたりの農地維持に関わる作業量が増大し、米農家だけで中山間地域の農業・農地を守ることが現実的に難しくなっている。そのため、『作り手』を育成すると同時に、「作り手」をサポートする「支え手」（関係人口）を増やしていく仕組みとして、『Work Rice』『シェアファーム』の立ち上げを行う。

【目指す関係人口の姿】

「作り手」×「支え手」の両輪による中山間地域農業・農地の持続化

「作り手」と「支え手」の両輪による中山間地域の農業・農地の持続化に向けて、現在イナカレッジが実施している「作り手」の育成に向けた取組（アグリバス）に加え、本事業を通じて、もう一方の「支え手」確保に向けたプログラムを新たに立ち上げる。

作り手

再生産可能な価格での販売
 （販路の確保）

アグリバス等既存のイナカレッジプログラムに対応

支え手

—農作業のサポート
 —販売等のサポート

本事業を通じて「支え手」人材の育成の仕組みを構築

設定課題

- ① 「支え手」となり得る人材の確保に向けた魅力的なプログラムづくり【集客】
- ② 未経験者でも農家の作業軽減に寄与できる仕組みの確立【米農家の作業軽減】
- ③ 単なる農作業の手伝いにならないようにするための継続的なつながりづくり【関係性の醸成】
- ④ 気軽に参加できるプログラムづくり【関わりやすさ】

Work Rice（柏崎市高柳、上越市清里区、小千谷市等）

米農家の日常の作業をお手伝いし、そのお礼として農家が作ったお米を受け取るプログラム。

【作業内容】

- ・生産サポート：草刈り、肥料まき、稲刈り等
- ・クリエイティブ系サポート：デザイン、ライティング、動画制作等
- 「労働」と「お米」の交換という仕組み、農作業だけでなくクリエイティブ系の仕事を加えることでプログラムの魅力づくり
- 未経験者でも農家の作業軽減に寄与できる仕組みづくりなど



【KPI】

農作業のサポート：50人日/年
 クリエイティブ系のサポート：10件のマッチング

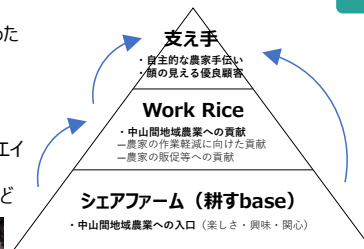
シェアファーム（出雲崎町）

中山間地域農業に関わるすそ野を広げるため、「農家のサポートまではできないが農に関わりたい」という人などを対象に、農業の楽しさ、農村の暮らしの魅力等を共有するとともに、農業に対する基礎的な知識等を学ぶ『シェア・ファーム』を開設。『Work Rice』は米農家をサポートするための本格的な作業なのに対し、『シェア・ファーム』は中山間地域の農に気軽に関われる入口づくりを目的として実施。将来的にはCSA農場としての自立を検討。



【KPI】

参加者：30人日/年

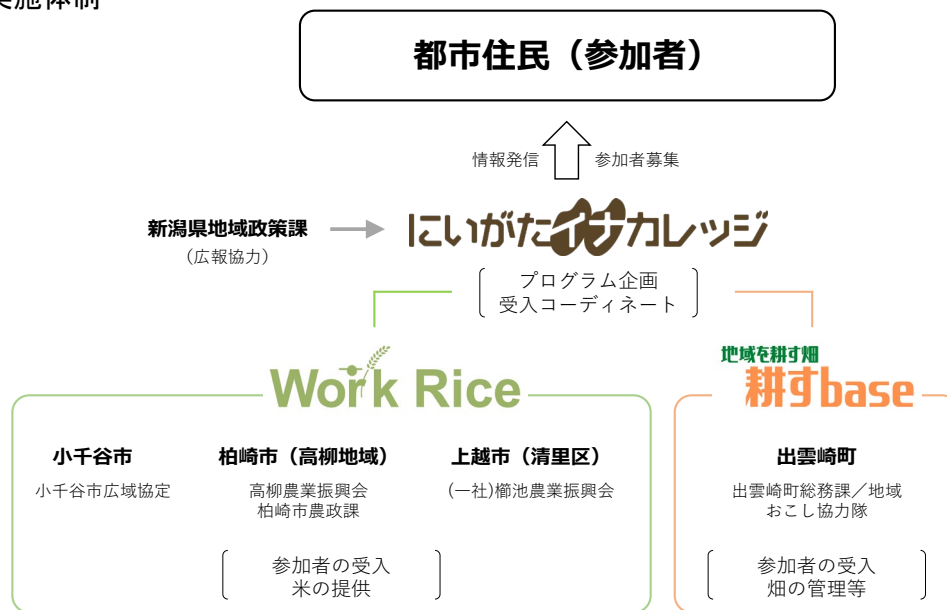


《支え手像》

- ・次年度以降も農作業等をお手伝いする「支え手」
- ・中山間地域農業を理解し、顔の見える関係のなかで定期的に米を購入する「支え手」
- ・CSA農場の会員としての「支え手」など

2.2 事業実施に係る運営体制

(1) 事業実施体制



(2) 事業実施団体及び関係機関の役割

団体名	役割
(公社)中越防災安全推進機構 にいがたイナカレッジ	事業全体の企画、実施地域との調整、情報発信及び参加者確保、実施地域でのプログラム実行サポート、効果検証、次年度以降に向けた検討、など
小千谷市広域協定	プログラム設計支援、活動当日の対応、次年度以降の「Work Rice」運用に向けた検討
高柳農業振興会 柏崎市農政課	受入米農家の開拓協力、受入、次年度以降の「Work Rice」運用に向けた検討
(一社)榎池農業振興会	「Work Rice」への仕事・米の提供、受入、次年度以降の「Work Rice」運用に向けての検討
出雲崎町/地域おこし協力隊	地権者との交渉、耕すbaseの管理、イベント企画、情報発信、参加者の受入コーディネート、など
新潟県地域政策課	除雪ボランティア参加者等への情報発信
株式会社クラウドワークス	Work Riceのロゴデザイン 動画マニュアル編集

2.3 実施スケジュール

事業内容	2022年										2023年	
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	
1. 農家へのお手伝いを“お米”で返礼するプログラム『Work Rice』の立ち上げ												
○受入農家の開拓および仕事内容・受入体制等の調整												
○参加者の募集・マッチング		公開	デザイン完成			適宜記事更新				次年度に向けたHPの充実		
・webページ立ち上げ												
・広報活動												
○技術習得機会の提供												
・段位制度の仕組み検討												
・講習会の開催												
・マニュアル作成												
○Work Rice試行運用												
・生産サポート							7/4(月)～開始					
・クリエイティブ系サポート								8月からスタート				
2. 農に関わるすそ野を広げる『シェア・ファーム（耕すbase）』の開設												
○農地の確保・受入体制整備												
○広報活動												
○シェア・ファーム（耕すbase）試行運用												
○農地の確保・受入体制整備												
○シェア・ファーム（耕すbase）試行運用												
3. 関係者を交えた成果検証												
○Work Rice												
・受入農家ヒアリング												
・参加者アンケート												
○シェア・ファーム（耕すbase）												
・参加者アンケート												
4. 自立化・自走化（次年度以降）に向けた検討												
○Work Rice												
○シェア・ファーム（耕すbase）												
5. 他地域等への横展開の可能性の検討												
6. 報告書とりまとめ												

2.4 活動内容

(1) Work Rice の実施

① 制度設計

都市部に暮らす人たちが、中山間地域の米農家の各種仕事のお手伝いを行い、その労力の御礼として農家が栽培する米を参加者に提供するプログラム『Work Rice』として制度設計し、都市部に暮らす人たちにとっては、普段あまり行く機会がない農山村地域を訪れ地域農業に寄与するとともに、農作業を通じて米農家とも交流を図れる“地域貢献ツーリズム”というコンセプトで発信した。

実際に生産現場で必要としているサポートとしては、農作業の手伝いのほか、デザインや写真・動画撮影、ライティングなどクリエイティブな仕事をサポートする人材が求められる。このため Work Rice の具体的な活動としては、「生産サポート（農作業の仕事）」と「クリエイティブ系サポート（販促等の仕事）」の2種類とし、それぞれの活動に見合った米の提供量を設定した。

類型	作業例	提供する米	効果等
生産サポート	畦草刈り	5kg/日	米農家の作業軽減と同時に、米農家と一緒に肉体労働で汗を流しながら、昼ご飯を一緒に食べることで、休憩時間などを通じて地域の暮らしや農業のことなど、「米農家と過ごす山時間」を通じて中山間地域への興味関心・共感の醸成などに努め、定期的に農作業を手伝うサポーターを育成。また参加者が農家からいただいた米を食べることで、その後の定期的な米の購入者の確保につなげる。
クリエイティブ系サポート	米袋のデザイン	60kg/件 (1年/人分の米の消費量 50kg)	米農家からすればデザイナーに依頼すれば安くても3万円以上の費用がかかる(米に換算すると110kg程度)。受注者から見れば同地域と同じ品質の米を3万円分小売店等で購入しようとする50kg相当となり、米農家にとっても参加者にとっても互いにメリットが得られる。

これをもとに受入農家からヒアリング等を行い、作業内容・時期・提供する米の量・作業当日の工程や役割分担などを調整しプログラム化を行った。

② 広報活動

広報活動を行うにあたっては、Work Rice 専用 HP を開設し、募集地域・作業内容・受入期間・受入農家などを発信した。

広報に活用した媒体などは下記のとおりである。

◆除雪ボランティア登録者への告知（効果○）

参加者募集にあたっては、新潟県では県内外の人たちが登録する冬期間の除雪ボランティア（スコップ）が組織されており、このような冬期のボランティアに参加する人たちが Work Rice の参加者になり得るとの仮説のもと、所管する新潟県地域政策課の協力のもと Work Rice の告知を行った。

この結果3名の参加につながり、いずれも「冬場以外でもできるボランティアを探していた」という声が聞かれた。

◆SNS 広告（効果◎）

農業や農村、ボランティア、地方などに興味がある層を対象に facebook、Instagram 広告により Work Rice の発信を行った。この結果、県内外の大学生を中心に Instagram を見ての問い合わせなどが多く見られ Work Rice への参加につながった。

◆ボランティアサイトへの登録（効果◎）

ボランティア募集サイト「activo」「ボランティアプラットフォーム」に掲載したところ、特に若い世代を中心に「activo」からの参加申込が多く見られた。

◆農業系求人サイトへの掲載（効果△）

第一次産業に特化した求人サイトへの掲載を行ったが、問い合わせは見られたものの参加にまでは至らなかった。

◆地元紙への掲載（効果△）

地元紙に Work Rice の取材を依頼し紙面に掲載いただいたが、参加には結びつかなかった一方で、市町村や地域などの受入側の立場の人たちからの問い合わせが見られ“知名度の向上”という点で成果が得られた。

◆県内大学への告知（効果×）

新潟県を通じて新潟県内の大学に Work Rice の告知を行ったが、問い合わせ・申込は見られなかった。理由としては現地までの足の問題が考えられる。

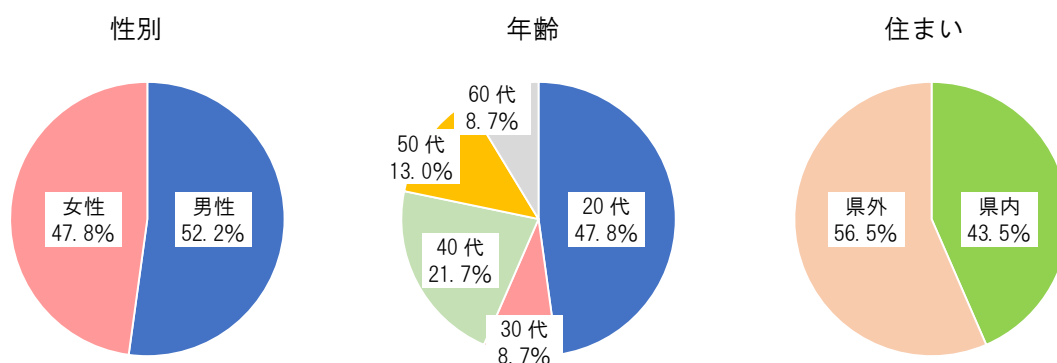


③ Work Rice（生産サポート）の実施

7月から Work Rice の受入を開始し、令和5年2月末までの問い合わせ・申込は80人で、このうち生産サポートには39人日（実人数23人）の参加が見られた。

【参加者の属性】

生産サポートの参加者の属性は下記グラフのとおりである。当初は物理的な距離の問題から県内在住の参加者が見込まれると想定していたが、実際は県外からの参加が過半を占め、草刈り等をしにわざわざ首都圏等の遠方から参加したいという人がこれほどいるということが分かった。



【作業の内容】

参加者が行った農作業としてもっとも多かったのは「畦草刈り」で、他は「電柵張り・撤去」「稲刈り」「糶摺り」などであった。



④ Work Rice（クリエイティブ系サポート）の実施

（ア）取材・ライティング～Writing Trip

小千谷市広域協定が小千谷産の米やその背景にある農村の暮らしなどを発信するwebサイト「こめむすび」に掲載する記事を作成するため、1泊2日の取材・ライティング合宿『Writing Trip』を開催し、この結果14本の記事が同サイトに掲載された。

日時：第1回 2022年8月20日(土)・21日(日)／第2回 2022年12月3日(土)・4日(日)

参加者：第1回4名／第2回2名、ほか体調不良で当日欠席し後日地域を訪れ取材した方1名

米の進呈：1記事30kg（2本以上記事を書いた方にはプラスして餅やその他の農産品）

作成記事本数：14本

タイムスケジュール：

（1日目）

13:00 集合・オリエンテーション

13:30～17:30 体験取材①

17:30～18:30 自由時間

18:30～20:30 夕食・交流会

20:30～ 自由時間・就寝

（2日目）

8:00～9:00 朝食

9:00～12:00 体験取材②

12:00 現地解散



(イ) パッケージデザイン

【上越市清里区】

上越市清里区では、これまで使用していた米袋のパッケージデザインを一新し地域全体で統一するため、Work Rice を通じて米袋のデザインに取り組んだ。また制作したデザインが地域で好評を得て追加で販促フライヤー・ポスターの制作も行った。

応募者：40代・女性／埼玉県／フリーデザイナー

内容：米袋のデザイン（5種類の大きさの米袋）、販促用フライヤー、ポスター

米の進呈：90kg+漬物



【糸魚川市】

他地域での Work Rice の取組を聞いた糸魚川市西海地区から「是非うちでもやってみたい」との問い合わせをいただき、地域内の農業法人が受け皿となって Work Rice を実施した。具体的には農業法人が長年使用していた米袋のデザインをリニューアルするという内容であった。

応募者：30代・男性／新潟市／デザイナー

内容：米袋のデザイン

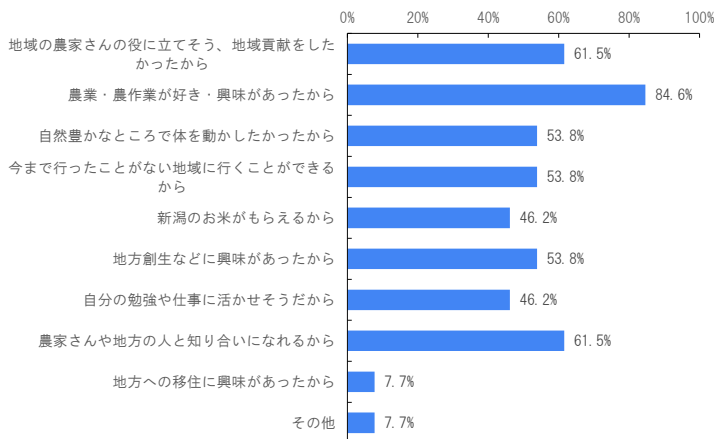
米の進呈：30kg

⑤ 参加者アンケート

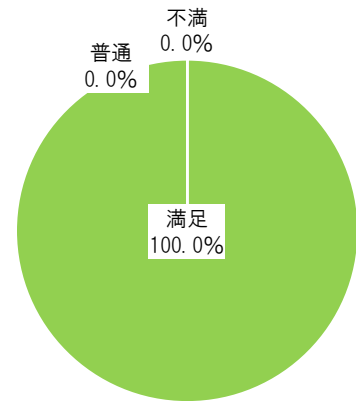
Work Riceに参加した方を対象にアンケートを実施した結果、以下のような内容であった。アンケートを実施したのが1月であったため、例えば7月の参加者からすると半年前に参加したプログラムのアンケートであったため、回収率が低くなってしまった（回答数13人）。

特に参加の満足度が100%であったことと、今後の関わりがWork Rice（お手伝い）に参加したい・遊びに行きたいを合わせると100%で、いずれも参加者にとって満足できるプログラムとして高い評価をいただいた。

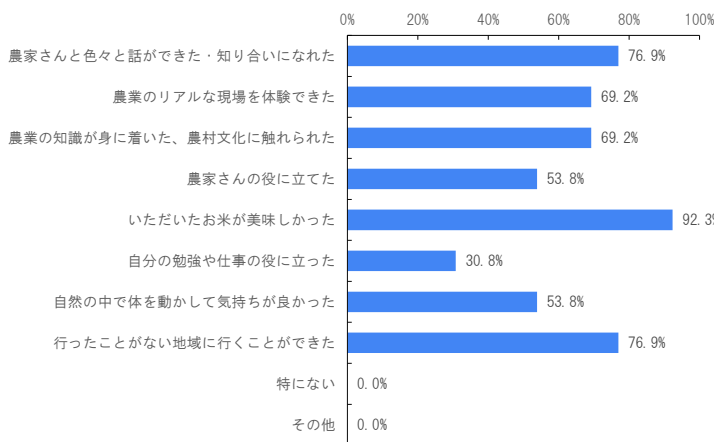
《参加の動機》



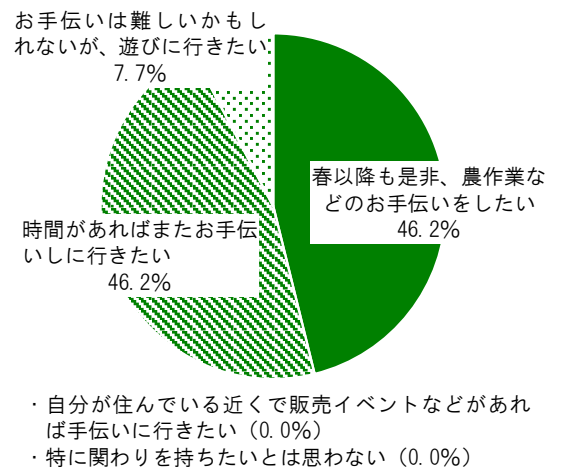
《満足度》



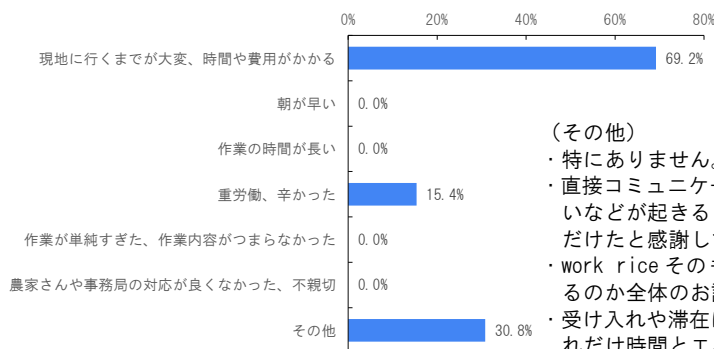
《参加して良かったこと》



《今後の関わり》



《参加してみて課題と感じたこと》



(その他)
 ・特にありません。
 ・直接コミュニケーションできる時間が圧倒的に少ないので、行き違いや勘違いなどが起きることもありましたが、素晴らしい取り組みに参加させていただくと感謝しています。
 ・work rice そのものにも興味があるので、成り立ちやどんな風に活動されているのか全体のお話も聞けたら嬉しかったです。
 ・受け入れや滞在については夫婦ともども大満足でした。ただ、受け入れにこれだけ時間とエネルギーを費やしていただくと、持続可能なかが心配。ぜひ、これからも続けていただきたいと思いますので。

(2) シェア・ファーム（耕す base）

① 制度設計・受入地域内での周知

中山間地域農業に関わる人のすそ野を広げるため、「農家のサポートまではできないが農に関わりたい」という人などを対象に、農業の楽しさ、農村の暮らしの魅力等を伝えるとともに、農業に対する基礎的な知識等を学ぶ場としてシェア・ファーム（「耕す base」と命名）を開設。『Work Rice』は米農家をサポートするための本格的な作業なのに対し、『耕す base』は中山間地域の農に気軽に関わられる入口づくりを目的として実施し、将来的には CSA 農場としての自立を検討する。



具体的には、出雲崎町柿木集落の畑約 2 反を借り受けて野菜等を栽培し、作業については「農作業等を通じた交流イベント」「日常的な畑の管理作業」に分けて参加者を募集し、都市住民と柿木集落を中心とした出雲崎町との関わりづくりを図った。

② 情報発信、参加者確保

耕す base の Instagram を開設し、主には県内都市部（新潟市、長岡市等）住民を中心に広報を行った。また出雲崎町の「広報いずもぎき」にも掲載したところ町内の非農家からの参加なども見られた。



③ 作業内容

(ア) 交流イベントの企画開催

- 5月21日(土) 植付祭
- 8月14日(日) ソバまき体験交流会
- 10月23日(日) 野菜収穫交流会（新型コロナにより中止）
- 11月3日(木・祝) ソバ収穫体験交流会
- 2月19日(日) ソバ打ち交流会

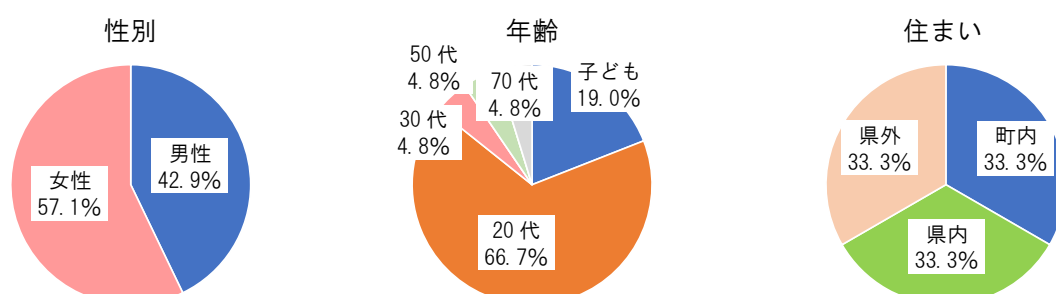


(イ) 定期的な管理作業の受入

毎週土曜日の午前中は参加者がいてもいなくても必ず畑作業を行う日と定め、これを開放日として参加者がいつ来ても畑作業に関われる機会を設けた。しかし、実際には受入側が水稻の繁忙期で田んぼ作業に手が取られたこと、地域内のイベント、天候などの事由により月 1～2 回程度の開放となってしまう。

④ 参加者

5月から開始した耕す base には延べ 36 人日の参加があり、当初は町外からの参加者を見込んでいたが、出雲崎町広報などに耕す base の活動を紹介したところ町内非農家（主に子育て世代）の参加も見られた。

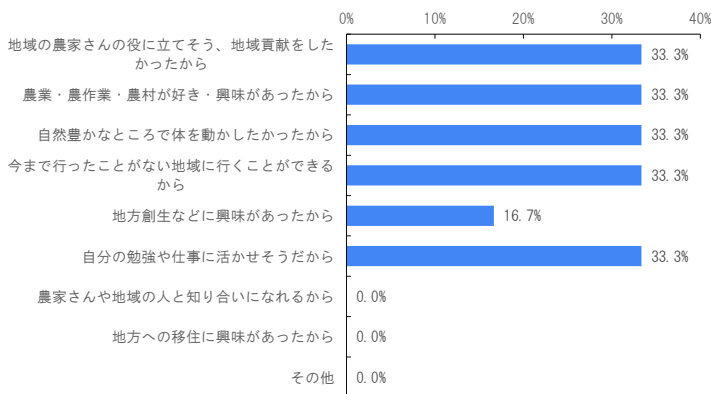


⑤ 参加者アンケート

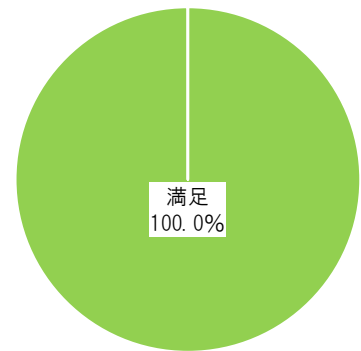
耕す base に参加した方を対象にアンケートを実施した結果、以下のような内容であった。アンケートを実施したのが2月であったため、例えば5月の参加者からすると半年以上前に参加したプログラムのアンケートであったため、回収率が低くなってしまった（回答数6人）。

特に参加の満足度が100%であったこと、また今後の関わりについては「企画から関わりたい」「日常的な農作業を手伝いたい」「イベントに参加したい」など、全ての人が何らかのかたちで今後も“関わりたい”と答えており、参加者にとって満足できるプログラムであったと言える。

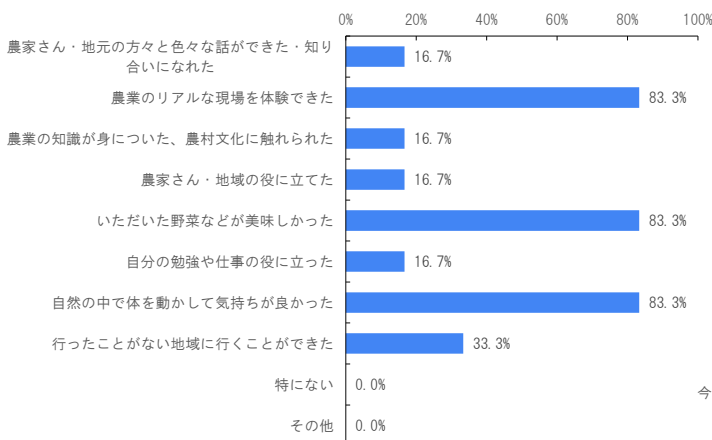
《参加の動機》



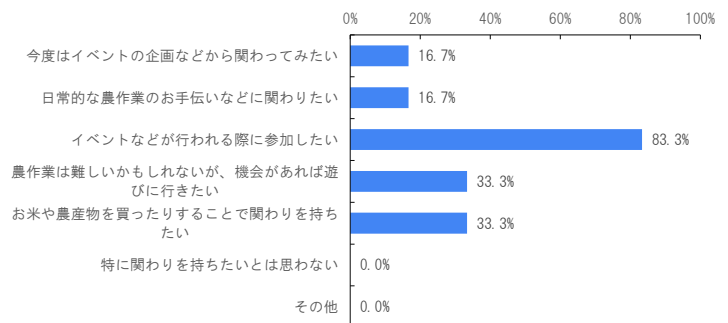
《満足度》



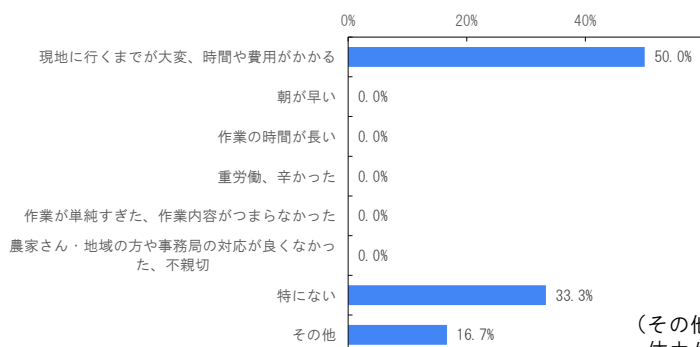
《参加して良かったこと》



《今後の関わり》



《参加してみて課題と感じたこと》



(その他)
・体力が無くて、役に立たなく申し訳なかった

2.5 課題解決のための取組

(1) 魅力的なプログラムづくり【集客】

都市住民にとって「面白そう」と思える集客力の高いプログラムとするため、以下の特徴を打ち出して発信を行った。

Work Rice の特徴① お米で御礼

Work Rice は、都市部に暮らす人たちが、中山間地域でお米を作る農家のお手伝いを行い、その労力の対価として農家がお米をいただくプログラムとして制度設計した。様々なことがインターネットで事足りる時代にあってあえて物々交換という仕組みとし、さらに米どころ新潟という地域の特色を生かすことで、Work Rice の注目度・集客効果を図った。

Work Rice の特徴②～クリエイティブ系の活動

農家のお手伝いという一般的なイメージが強いが、Work Rice では商品パッケージのデザインやライティングなどクリエイティブな仕事の要素も入れることで、関わりしるを広げ参加者層の拡大を図った。

Work Rice の特徴③～地域貢献ツーリズム

Work Rice の現場は決して観光資源に恵まれている訳ではないため、都市部に暮らす人たちにとっては、普段あまり行く機会がない農山村地域を訪れ、地域農業に寄与しながら米農家と交流する“地域貢献ツーリズム”というコンセプトのもと発信を行った。

(2) 未経験者でも農家の作業軽減に寄与できる仕組みづくり【米農家の作業軽減】

① 技術習得機会等の提供～「刈払機」講習会の開催

刈払機の取り扱いは、農作業においては必要な基本的なスキルで、Work Rice においても刈払機を使用する機会が少なくない。受入農家にとっては参加者に対して刈払機の取り扱いについて毎回同じ説明をするのは手間となるため、Work Rice への参加意向がある方を対象に刈払機の取り扱い講習会を開催した。当日は2名の参加が見られ、うち県外からの参加者はその後 Work Rice への参加につながった。

開催日時：2022年6月18日(土)10:00～12:00

開催場所：新潟県柏崎市高柳町内

参加者：2名(県内1名、県外1名)

内 容：刈払機の説明、取り扱い方、実地など



② マニュアル動画の作成

上記の講習会を受講していなくても、農作業の基礎的な技術として事前に「刈払機」の取り扱い、及び実際の現場における作業のやり方やコツなどが学べる動画を作成した。

③ 段位制度

参加者にどの程度の作業を任せられるのかなど、受入農家が円滑に受入の段取りができるよう、参加者のスキルや作業の習熟度等に応じた段位制度の仕組みを検討した。雪かきボランティアでは既に同様の仕組みが整備されており、これを参考に制度設計を行うこととした。

(3) 単なる作業要員にならないようにするための継続的なつながりづくり【関係性の醸成】

農作業等を通じて参加者と受入農家との交流が図られ、その後も続く継続的な関係性を育むためのポイントとして、作業の合間を通じて出来るだけ多くの会話ができる機会を工程の中に組み込むよう努めた。

具体的には、作業が始まる前に最初にお茶を飲みながら丁寧に自己紹介をしたり、何に興味があったのかなどを丁寧に深掘りしたりすることで、その後の休憩時間等に受入農家が参加動機等に応じた話をしてもらうなどの対応を促進した。

(4) 気軽に参加できるプログラムづくり【関わりやすさ】

中山間地域農業の楽しさ、農村の暮らしの魅力を体験し、農業の基礎的な知識等を学ぶ場として『耕すbase』を開設した。①参加者と地元の農家とが一緒に作業する、②一緒に食事をしたりするなかで自然なかたちで交流できる場をつくる、③農作業だけでなく収穫した農産物の加工等を行うなど、地元の人たちと一緒に行動する様々な体験要素をプログラムの中に組み込むよう努めた。

3 モデル事業としての成果検証

3.1 目標の達成状況

事業の目標・達成状況

目標	達成状況
Work Rice ・ 『Work Rice』 生産サポート参加者数：50 人日 ・ 『Work Rice』 クリエイティブ系サポート：10 件のマッチング ・ 次年度以降も米農家の作業を手伝うなど、何らかのかたちで地域との関わりを持ち続けたい人：20 人 ・ 作業軽減につながったとする米農家：10 軒 ・ 『Work Rice』 参加者による米の購買意向：30 人	39 人日 16 件 100% (13 人) ※1 3 軒※2 76.9% (10 人) ※1
シェア・ファーム（耕す base） ・ 『シェア・ファーム（耕す base）』 作業参加者：30 人日 ・ 次年度以降も継続して中山間地域の農業に関わりたい人：10 人	36 人日 100% (6 人) ※3

※1) 参加者アンケートの回答数が13人であったため実人数としては目標を達成していないが、回答者の割合でみると比較的高い値を示している。アンケートを実施したのが1月で、例えば7月にWork Riceに参加した人からすると半年前に参加したプログラムのアンケートであったため、回収率が低くなってしまった。

※2) 受入農家を開拓するにあたり普段個人や家族経営で米づくりを行っている中山間地域の農家にとっては「人に教えるより自分でやった方が早い」とする考えの人が多く、今年度は“様子見”を希望する農家が多かった。このため、今年度複数人受け入れた農家が3軒のみであったため達成状況が低くなってしまった。ただし3軒の農家からの評価はいずれも高く、次年度以降の受入農家の拡大に向け、令和5年3月に受入農家説明会を開催し受入体制の強化を図るところである。

※3) 参加者アンケートの回答が6人であったため実人数としては目標を達していないが、今後も何らかのかたちで“関わりたい”という回答者の割合は100%。アンケートを実施したのが、予定していたすべてのプログラムが終了した2月に実施したため、例えば5月に耕すbaseに参加した人からすると半年以上前のプログラムのアンケートでなり回収率が低くなってしまった。

3.2 課題解決に向けた成果

(1) 魅力的なプログラムづくり【集客】

① Work Rice

お手伝いの対価を米として進呈する「Work Rice」というプログラムが、都市住民にとってどこまで響くのか（参加者が集められるのか）という点が本取組のテーマの一つであった。

6月上旬から参加受付を開始したが、結果として80名の申込・問い合わせがあり、生産サポートに延べ39人日、クリエイティブ系サポートに9人の参加（16件のマッチング）が見られ、うち県外からの参加者が6割近くを占めていた。

申込・問い合わせは80名であったが、参加希望者と受入農家との日程が合わなかったり、悪天候による作業の中止、参加希望者の体調不良による欠席などがあつたりしたほか、前日の申込で受入側が対応できないなどの理由で参加できなかったという状況が見られた。

特に多かったのが、作業現場が公共交通では行けない・行きにくい地域ばかりであるため、現地まで自家用車で来ることが必須となり、車を所有していない方の参加が難しかった。

最寄り駅まで受入農家を送迎するなど考えられるが、今年度受け入れた地域の場合最寄り駅まで片道45分の距離にあり、往復分の手間・時間を考えると、本事業の趣旨の一つである“農家の作業軽減”と矛盾することとなるほか、事務局での送迎はWork Riceの持続性を考えると得策とは言えない。Work Riceに限らず過疎地域で関係人口を増やすうえで“足の確保”は非常に大きな課題であると感じた。

また、当初距離の問題から県内の都市部在住者からの参加を見込んでいたが、参加者の6割近くが県外在住者で、わざわざ遠方からでも草刈りなどの農作業に参加したいという意向があるということがわかった。

傾向を見ると、“農業”というよりも“ボランティア”というキーワードからWork Riceの取組を知り問い合わせするケースが多く見られ、多くの参加者は具体的な作業内容に対する特段のこだわりは見られず、むしろ「未経験な自分でも役に立てるか？」という声が多く聞かれた。

Work Riceでは参加者が行うお手伝いに対しお米で御礼するという仕組みとしたが、“新潟のお米がもらえる”ことが集客に直接結びついた訳ではなく、空いている時間で（一日だけでも）参加できる“気軽さ”や自然豊かな場所で体を動かせる“非日常感”などが大きな参加動機となっていた。ただし、参加後のアンケートを見ると“いただいたお米が美味しかった”とする声が多くプログラムの満足度の高さの要因の一つとなった。

今年度の取組によって都市住民のどのような層をターゲットとすべきか、広報手段などはある程度の手応えを掴むことができ成果があつたと言えるが、一方で現地までの交通手段をどのように確保するかが今後の大きな課題と言える。

② 耕す base

耕す baseには“体験”として農作業を行いたい、農村に行ってみたいなど、ライト層からの申込が見られ、結果として36人日の参加となった。特に20代の女性の参加が顕著であった。「農業や農村に興味はあるけど、とても農家の役に立てるような仕事まではできない・自信がない」「純粋に取組が面白そう」などの理由で参加する人が多く、農業・農村に関わりたいライト層の受け皿として耕す baseの可能性が見られた。

また、当初は想定していなかった町内在住者（家族連れ等）の参加も見られ、「同じ町内ではあるけど普段行く機会がない山間地域のこと・山間地域の人たちとのつながりが生まれた」「関わるきっかけが出来た」「今まで見えていなかった出雲崎の魅力を発見した」などの感想があげられ、都市住民だけでなく、町内にも需要があるという新たな発見があつた。

(2) 未経験者でも農家の作業軽減に寄与できる仕組みづくり【米農家の作業軽減】

① 生産サポート

年度当初は多くの農家を巻き込んでWork Rice（外部人材の受入）の普及を図ろうと考えていたが、

事前の農家説明やヒアリング等の結果から、中山間地域の米農家は基本的にアルバイト等で人を雇うことがほとんどないため、人の受入（作業のお願いの仕方等）に慣れている農家が少なく、「人に教えるよりも自分でやった方が早い」という考えの農家が多いという実態がうかがえた。また多くの農家を巻き込むには、農業未経験者でもどの程度までの作業ができるのかなどを把握する必要があったため、令和4年度は受入農家を絞り、農家にとって Work Rice の有用性の実証、受入ノウハウの蓄積を図ることを重視した結果、令和4年度の受入農家数は5軒で、うち複数回受け入れた農家が3軒という結果となった。

実際に21人日・12人日受け入れた2軒の農家にヒアリングを行うと、作業内容としては「電柵張り」「電柵片付け」「除草剤散布」「稲刈り」が受入農家にとって非常に助かった（作業軽減効果が高い）としており、次に「草刈り」「籾摺り」などであった。総じて“受入に係る手間<作業の軽減”という評価であった。

	4月	5月	6月～10月	6月～7月	6月～7月	6月～7月	7月～8月	9月～10月	9月～10月	11月～12月
作業項目	苗おこし	田植え	草刈り	溝切り	肥料散布	除草剤散布	電柵張り	稲刈り	籾摺り	電柵片付け
作業内容			刈払機を使用した畦の草刈り			2人1組になって軽トラから除草剤・農薬等を散布	鳥獣害対策として、田んぼ周辺に電気柵を設置	刈った籾をライスセンターまで運搬	ライスセンター内で地域の農家が収穫した籾を玄米にするための一連の作業の補助	設置した電気柵の撤去
評価	—	—	○	—	△	◎	◎	◎	○	◎
備考	令和4年度は未実施	令和4年度は未実施	機械の説明の時間はあがるが、作業としては助かる	令和4年度は未実施	技術が求められる	作業補助員として助かる部分が大きい	特別な技術等が不要、且つ人手があればあるだけ助かる	マニュアル車の運転免許および運転の慣れが必要	作業補助員として助かる部分がある	特別な技術等が不要、且つ人手があればあるだけ助かる

（受入農家の声）

【草刈り】基本的にはとにかく人手があればあっただけ助かる作業。最初に刈払機の説明などに時間は割かれ、（人にもよるが）機械の扱いに慣れるのに半日くらいかかる。しかし午後には十分に戦力として活躍してくれて助かった。

【肥料散布】慣れないと散布にムラができ稲の発育にも影響するためあまり適さないかもしれない。

【除草剤散布】必ず2人1組で行うため、そこを参加者の人が担ってくれて助かった。

【電柵張り・片付け】素人でもできる単純作業且つ人手が必要であり、一人でも多く人がいてくれると助かる。

【稲刈り】稲刈りは基本的に機械で行うが、どうしても毎年機械が入れない田んぼが出てしまう。そこを参加者が手刈りしてくれてありがたかった。また軽トラが運転できる方にライスセンターまで籾の運搬をしてもらったことで稲刈りの作業効率が上がり非常に効果的だった。

【籾摺り】収穫期はライスセンターには様々な農家が刈った籾を持ち込むため、その対応に手間が取られ機械の稼働率が下がるという課題があった。そんな中参加者が専属で籾摺り・玄米の袋詰めをやっていただいたことで機械・施設の稼働率が上がり効果的であった。

【講習会の開催、マニュアル作成】

Work Rice に興味がある都市住民を対象に刈払機講習会を企画・実施し、講習会参加者がその後 Work Rice の作業に参加するなどの姿も見られたが、そもそも講習会のためにわざわざ遠方から交通費をか

けてまで参加するという人が少なく現実的なやり方ではなかった。6月に講習会を実施して以降は受入農家やイナカレッジスタッフが参加者にその都度刈払機の扱い方を説明することで対応を図った。

一方でそんな中でも毎回受入農家が機械の扱いについて説明しなければならないという手間を省くため、講習会の内容をもとに刈払機の取り扱い動画を制作し、次年度からはWork Rice 参加前に動画を視聴することで予備知識の習得を図ろうと考えている。



【段位制度】

今年度の参加者を見ると令和4年度内に複数回来訪する人（リピーター）は5人で、多くは年度内に一度参加し来年また参加したいという人たちであった。このため当初想定していた参加者のスキルや作業経験などをもとに設定する段位制度については令和5年度以降の取組とし、令和4年度は参加者一人の作業カルテを作成し、行った作業内容、作業等に対する受入農家の所見などをまとめた。

② クリエイティブ系サポートの成果・効果

【上越市】パッケージデザイン・販促デザイン

受入団体『榊池農業振興会』では、当初は「本来お金を払ってやってもらうことを米でやってくれる人なんていない」と懐疑的であったが、実際に地域を訪れ懸命に取り組むデザイナーとマッチングできたことで、「この取組は非常に良い」という評価に変わり、またデザインが好評を得たため追加で販促用のフライヤーやポスターの制作を行った。

また『榊池農業振興会』で統一的な米袋を開発しデザインが農家からの評価が高かったことで、これまで農家個々で注文していた米袋の発注が集約され、地域全体で経費削減が図られるという効果も見られた。

【糸魚川市】デザイン

地域の農業法人「(株)お米の配達人」でWork Riceを受け入れていただき、米袋及び自家製の餅の商品パッケージのデザインが一新された。

【小千谷市】ライティング

小千谷市広域協定では、小千谷市産米の発信を行うためのサイト『こめむすび』を開設したところである。しかしこのサイトの受益者である米農家自身は、日々生産活動で忙しく、またサイトに掲載する記事を作成するという事は不得手である。またこのような情報サイトは、きれいにデザインされたサイトを立ち上げるものの、その後更新頻度が低く活用されないという例は少なくない。

このような状況のなかで、非農家且つ地域外の人材が農業の現場を訪れ取材・記事を作成し、それによって『こめむすび』が頻繁に更新される仕組みを確立することができた。

(3) 単なる作業要員にならないようにするための継続的なつながりづくり【関係性の醸成】

① Work Rice

Work Rice の実施にあたっては、受入農家に対して“無理のない範囲”で参加者への対応をお願いしていたところであるが、想定以上に個々の農家で参加者とのコミュニケーションを積極的に図っていただけた。農家によって受入のかたちは様々であるが、作業を開始する前に農家と参加者とお茶を飲みながら丁寧な自己紹介からスタートし、そこで細かい参加動機やどんなことをやってみたいのかなどを聞いていただき、参加者ニーズを踏まえながら作業を行っていただくなどの配慮が見られた。また、少し余分におかずを作って昼食を参加者に提供したり、中にはそのままお宅に参加者を一泊させたりする農家の姿も見られた。

農家のなかに受入に対するポイントやノウハウが蓄積され、回数を重ねるたびに“農作業の軽減”と“参加者ニーズ”の両面を満たせるような配慮が出来るようになってきたと言える。

こういったことが参加者アンケートにもあらわれ、次年度以降も“Work Rice に参加したい”とする割合は92.3%であった（残りの7.7%は「作業は難しいがまた遊びに行きたい」という回答で、参加者全員が今後も何らかの“関わりを持ちたい”としている）。

また Work Rice への参加をきっかけに以下のような動きが見られた。

- ・参加者がその後受入でお世話になった農家から直接米や加工品を購入。
- ・新潟県内への就職：もともと新潟に縁もゆかりもなかった参加者（大学生）が、Work Rice の参加がきっかけとなって新潟県庁に就職（内定）。
- ・イベント手伝い：『榊池農業振興会』が出店する川崎市内のイベントに売り子としてお手伝いに訪れる。

② 耕す base

当初は農作業だけでなく、参加者と地域住民と一緒に食事をしたりする場を設定して関係性の醸成を図ろうと考えていたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、想定していたよりもイベントの回数が減少するほか、一緒に料理をしたり食事をするなどの場を設けにくく、十分な交流が図れたとは言い難い結果となってしまった。

参加者アンケートでは今後も耕す base に関わりたいという意向は多く見られたが、将来的な CSA 農場の実現については、「お金を支払って、地域農業を支えながら、一緒に農作業などにも参加する」という関係性にまでは至っておらず、CSA 農場についてはまだ時間を要するであろう。

(4) 気軽に参加できるプログラムづくり【関わりやすさ】

中山間地域の農業に関わる人のすそ野を拡大するためのプログラムとして耕す base を実施したところであるが、当初の想定よりも多くの人々の参加が見られるほか、Work Rice への問い合わせ・申込の中には“農業体験”を期待している人も少なからず見られ、このような人たちに対しては耕す base を紹介するなどの対応をとったことで、幅広い層の人たちの受入（幅広い中山間地域の農に関わるきっかけづくり）につなげることができ、Work Rice と耕す base の両プログラムの相乗効果が見られた。

3.3 その他の成果

(1) 県内企業の参加

CSRに積極的に取り組むいくつかの県内企業にWork Riceの取組を紹介したところ、全国展開するサービス業事業者からCSRの一環として地域農業の手伝いを行いたい旨連絡があり、実際に数名の社員が柏崎市高柳地域のWork Rice（農作業のお手伝い）に参加いただいた。この結果、令和5年度からは月1回のペースで当該企業の社員が農作業のお手伝いに参加することとなった。

(2) 受入農家の声

受入農家にヒアリングを行ったところ、Work Riceはいわゆる“農業体験”“交流”ではなく、普段の作業を手伝ってもらうというスタンスなのでお客様扱いする必要もなく、また中山間地域農業の日常の作業や実態を知ってもらえる・体感してもらえることから、「非常に意義がある取組である」などの意見をいただいた。

また全くの無償だと受け入れる農家としても“申し訳なさ”や“ボランティアにどこまでやらせて良いのだろうか”というような遠慮が働くが、Work Riceの場合農家がちゃんとお米で御礼すること、それが現金ではないため受入農家としても取組のハードルが下がること、さらに“農家の日々の作業のお手伝い”というコンセプトを理解した上で参加者が来るので作業を頼みやすいなどの声が寄せられた。

この結果、令和5年度から柏崎市高柳地域ではWork Riceの受入を地域全体に広げていくため、地域の農家に対してWork Riceの説明会（事業の趣旨や受入条件等の説明、実際に受け入れた農家から受入のポイント等を説明）を開催する予定である（令和5年3月頃に実施予定）。

(3) 地域内の波及効果

【出雲崎町】

耕すbaseを実施していた柿木集落では、最初は「何かやってるなあ」という傍観者的立場であった地元住民が、地域外から参加者が訪れる姿を見て少しずつ口を出し始めたり、どんな人が参加しているのかなど興味が生まれた。また耕すbaseの取組が地元紙に掲載されたことで周辺市町村の人が柿木集落に見学しに訪れ、その際に近所の人が耕すbaseを案内したりしてくれるなどの姿が見られるようになった。

さらに耕すbaseを通じて地域外から若い人たちが訪れたことで、集落外の農家の方が手伝いに来てくれたりするほか、農業委員会からは「同様の取組をやりたい」、地元の道の駅からは「道の駅で町外の若い人たちと連携した取組ができないか」などの相談が来るようになり、令和5年度から農業委員会や道の駅と連携した取組をスタートさせていくこととなった。

4 今後の事業のあり方

4.1 自立化・自走化の検討

(1) Work Rice

Work Rice の事業を継続していくにあたり、直接的な受益者である米農家個々から費用をいただくというよりも米農家で構成され、且つ中山間地域地域農業の維持・発展等に資する予算を有する広域協定からの費用負担を念頭に令和5年度以降の取組を考える。

今年度 Work Rice を実施した柏崎市高柳地域、上越市清里区、小千谷市では、令和5年度も引き続き継続していくこととし、現在実施に向けて各地域の広域協定等と調整を行っているところである。

【柏崎市高柳地域】

今年度は同地区内の2集落（2軒の農家）で受入を行った。いずれの農家からも Work Rice に対する評価が高く、この結果を受け次年度からは高柳農業振興会を中心に、中山間地域等直接支払いの枠組みを活用して Work Rice を高柳全域で取り組むことで関係者の合意形成が図られた。令和5年3月に高柳地域の農家を対象にした Work Rice の説明会を開催し、次年度の受入農家を定めることとしている。

【上越市清里区】

同地区では次年度から農林水産省の「農村型地域運営組織（農村 RMO）」の事業に取り組むこととし（事務局：楡池農業振興会）、その一環として Work Rice の継続及び関係人口創出に向けた活動を推進する予定で、イナカレッジではこれら事業推進及び外部人材受入のアドバイザーとして関わることとなっている。

【小千谷市】

小千谷市でも中山間地域等直接支払い制度の枠組みのなかで、令和5年度も Writing Trip を継続することとして小千谷市広域協定での合意が図られた。

(2) 耕す base

当初耕す base では将来的な CSA の実現を想定していたが、コロナ禍で活動が制限され“出雲崎町の農家・農業等に共感して、お金を支払いつつ支援する”という関係性を育むまでには至らなかった。

一方で、町内外延べ36人が耕す base に関わり、またこのような活動を見ていた町農業委員会や道の駅から“町外の人と連携した取組を行いたい”などの声があがり、当初の想定にはなかった活動の広がりや可能性が見られた。

次年度においては、地域おこし協力隊が中心となって農業委員会と連携したかたちで耕す base を継続し CSA の実現を目指した活動を引き続き行っていくとともに、さらに道の駅をフィールドにした町外の人を巻き込んだ関係人口プロジェクトの企画・実施などを予定し、イナカレッジではこれらの活動を行う地域おこし協力隊のサポート役として関わっていく予定である。

さらに、今年度出雲崎町役場との協議のなかから、ふるさと納税と連動した CSA の可能性についても協議し、ふるさと納税の活用は町役場としても十分に可能性があるとの認識で、そういった意味でも次年度以降も外部の人たちが関わる地域農業の可能性について追及していきたい。

4.2 横展開の可能性

今年度も開始当初は予定していなかった糸魚川市から「是非うちでも受け入れてみたい」という声があげられ年度内に数回の受入を試行したほか、県内の他の市町村（2市村）からも「来年度うちでも検討したい」との声をいただくなど、受入にあたっての地域ニーズは一定数あるものと考えられる。

(1) プログラム実施に係る費用の確保

Work Riceの受益者は作業を手伝ってもらう米農家であるが、経営が厳しい個々の農家から費用負担を強いるのは現実的にハードルが高いため、中山間地域等直接支払い制度の受け皿であり米農家で構成される“協定”と連携することで、必要な費用の確保が図られるものとする。

ただし、農家の集まりである協定から費用を捻出するには、農家との間に相当な信頼関係や実績などが必須で、そういった意味では他地域への横展開を考えるうえでは、まずは地元農家をはじめとする関係者との信頼関係をつくることから始める必要がある。

(2) 現地でのコーディネーターの存在

今年度は、若い受入農家や密に連絡が取れる協定事務局員、あるいは現地で活動する地域おこし協力隊がいたことから、イナカレッジとの各種調整を円滑に行うことができた。

多くの場合受入農家は高齢者であるため、事務的な連絡・調整などが密に取れる現地コーディネーターの存在が取組を横展開していく上で必要不可欠となる。具体的には地域おこし協力隊や集落委支援員等がその役割を担うことが想定される。

(3) 交通手段の確保

中山間地域の多くは公共交通が弱いであり、関係人口プログラムを実施する際に“足の確保”は大きな課題となる。受入先の農家等が最寄り駅まで迎えに行くことも考えられるが、そもそも人手が欲しいというニーズに合わせて実施するプログラムであるため、送迎に手間が取られてしまえば本末転倒になってしまう。年数回程度の頻度でイベント的に実施するのであればコーディネーターが送迎しても良いが、恒常的な仕組みとしてWork Riceを実施するのであれば、現段階では“現地集合・現地解散”とせざるを得なく、事業の横展開を図る上では自家用車を所有しない参加希望者をどのように対応するか地域に応じた対応策が求められる。